

作者プロフィール

袖木 文夫氏 千葉県隊友会会員 習志野支部長 桧町陸幕 平成2年退官 1958年防衛大学卒
元防大山岳部監督 現自衛隊山岳連盟会長

穂高・岳沢の春



前穂と奥明神沢(独標から)

ゴールデン・ウィークも後半の5月初旬、若い人たちに付き合って穂高・岳沢に入った。春の岳沢にキャンプして、前穂や奥穂を登りまくろうという計画である。

上高地は、観光客でごったがえしている。春の日差しの中を散策しながら、白銀に輝く槍・穂高連峰の風景を堪能できるとあっては、この季節、観光客が押し寄せるのも無理はない。バス・宿泊パックのツアーで、上高地はおろか、近傍の涸沢や岳沢の山小屋までが満杯とのこと。

我々は、上高地の喧騒を後に岳沢に向かう。河童橋を渡り樹林帯に踏み込むと、そこはもう雪の世界である。上高地から約3時間で岳沢小屋下部のダケカンバ林のキャンプ地域に到着し、テントを張った。積雪は3~4センチ、例年に比べやや少な目である。

テントを張り終わってほっと一服。西穂、奥穂、前穂、明神に囲まれた夕暮れの岳沢は、ただ静かである。西穂のピークの一つ一つがシルエットとなって数えられる。ジャンダルムと奥穂がすぐ頭の上に覆いかぶさって見える。見下ろすと、上高地の灯りが小さくまたたいていた。

翌朝、晴天。7時30分出発。奥明神沢を



岳沢から見上げる奥明神沢

前穂に向かう。出発前に日焼け止めクリームをたっぷり塗った。雪面はバリバリに凍り、アイゼンが快調である。所々にデブリが出ているが、この冷え込みでは雪崩の心配もない。前穂頂上着11時。眺望絶佳。涸沢を隔てた北穂~槍ヶ岳のスカイラインが誠に優雅である。吊尾根に続く奥穂がいかにも猛々しい。帰りも同じ経路をとり、帰幕は午後2時過ぎ



奥明神のコル

となった。

夕方、珍客があった。バスツアーで岳沢小屋に泊りに来た山仲間が、酒とオツマミを提げて陣中見舞いに来たのである。さあ大変、大宴会である。アルコールの入った岳沢の夜は、遅くまで山談義に沸いた。



前穂からの奥穂~槍